

## 天目中峰研究序説：元代虎丘派の一側面

野口，善敬  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18049>

---

出版情報：中国哲学論集. 4, pp.18-32, 1978-10-01. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 天目中峰研究序説

——元代虎丘派の一側面——

野口善敬

## 一、南宋禅の終焉

天目中峰（一二六三～一三二三）の師であり、険絶の門戸を誇った高峰原妙（一二三八～一二九五）が、死地と選んだ天目山西峰の師子巖に入ったのは、元の至元十六年（一二七九）の春のことであった。この至元十六年は、取りも直さず南宋の祥興二年に当たり、この頃天目山より遙か南方、広東沖の厓山に於ては、元軍に最後の抵抗を試みていた張世傑ら南宋の遺臣達が悲壯な最後を遂げ、一世紀半に渡って命脈を保った南宋も、正に終焉を迎えようとしていたのである。宋代に五家七宗の分枝を伸ばし、百花繚乱の華々しい展開をして、嘗てない繁栄を築いた禅門にとって、この南宋の滅亡は、或る意味に於て自らの終焉をも意味するものであった。

南宋に於ける禅の流行は、出家集団に止まるものではなく、在家の參禅、特に士大夫階級への広範な浸透を特長とするものであったが、この流行を爆発的なものにしたのは、看話禅の大成者として知られる大慧宗杲（一〇八九～一六三）の出現であった。しかも大慧出現の意味は、単に方法論としての看話禅を完成したという、禅門のお家内部のことに止まるものではなかった。自ら北宋の滅亡という激動する歴史の中にあり、金の南下・国家滅亡の危機を目前にして、「予は学仏の者と雖も、然れども君を愛し国を憂うるの心は、忠義の士大夫と等し」（大慧法語・下）と自らの真情を吐露する大慧の禅は、禅門を越えて怒濤渦巻く歴史の大海に、大きな渦を巻き起こしていくことなのである。

大慧禅が当時、士大夫階級に圧倒的人気を博した最大の理由は、聡明な才能と豊富な知識学問を持ちながらも、国家危機を目前にして何ら為すすべもなく、深刻な焦燥感に駆られて、この行き詰まり脱出のための模索を繰り返していた士大夫達に対し、「心術は是れ本、文章学問は是れ末」（大慧法語・上）と禅による自己の根底からの翻転定立

こそが、一切に先立つ要務であると、明確な解答を打ち出した所にあるが、更に重要なのは、大慧禅が世間法即世間法・出世間法即世間法と、世間・出世間不分離の立場を前面に押し出して、激動する社会に在って苦惱する士大夫に、即今当下の一点に於ける、自己と社会とを包み込んだ集約的な対決を求め、ともすれば非難されがちな禅の現実社会からの遊離・歴史の動向に対する無関心といった、所謂空虚さを真向から否定し、自ら「菩提心は則ち忠義心なり、名異なるも体同じ」（大慧法語・下）と自己の生死究竟と社会的道理とは矛盾せず、禅の一心こそ世間・出世間を包み込んで余りないと言いつ所にあったといえよう。この様な大慧の士大夫接化の主眼は、当然「世間相を壊せずして実相を談ずる」（大慧法語・中）、つまり在家悟道の実践推進にあり、その手段として大慧は、社会生活を撥無することなき、動静一貫した話頭による工夫参究を勧め、更には「儒即釈・釈即儒」（大慧書・答汪状元）と儒仏一致、ひいては三教一致論を縦横に展開駆使して、儒仏間に一線を劃すことなく、儒教的倫理観に漬り切った士大夫の倫理意識を、殊更に逆撫であることを避けようとしたのであった。

この様な世出世一体の看話禅によって、現実社会と剝離することなく、むしろ生々しい社会状況を包み込み、そこに猛然と突き進ませる大慧禅は、その性格故に大慧に十七年もの苦難に満ちた流罪生活をもたらすことにもなるが、この改頭換面の動的禅によって、大慧は宋代思想界の檜舞台に踊り出、弟子二千と法席を振わして「臨済の再興」と称され、明の陳建をして「禅学は達磨に興り、慧能に盛んにして、宗杲に極りぬ」（学菴通弁・巻七）と言わしめた如く、禅門の黄金時代を現出するのである。

仏教界に於て大慧禅が隆盛を誇ったこの時代は、金南下の危機を背景にして、思想界全般に渡って活発な動きを示した時代であり、儒学界に於ても、禅の流行と歩調を合わせるかの様に、大きな盛り上がりを見せる。特に大慧に少し遅れる朱子（一一三〇〜一二〇〇）の出現は、大慧禅にとって大きな脅威となる。大慧を「禪家之俠」と評した朱子は、当時士大夫の間に蔓延していた大慧禅が、現実社会の動きに対する的確な対応能力を全く欠如した、口先だけの危険この上ないものであると激しく攻撃し、大慧禅に大きな打撃を与えることになるのである。もちろん朱子の出現によっても、禅門内に於ける大慧禅の優勢が崩れることはなかったし、又朱子の非難が、真に大慧禅の本質を突き得ていたかどうかは問題であるが、儒学を本業とする在家士大夫に対しては大きな説得力を持ち、士大夫の大慧禅へ

の傾倒に、大きな歯止めとなつたことは否めないであらう(1)。

大慧の死後南宋滅亡までの一世紀余り、大慧禅は「字三写を経て烏焉、馬と成る」の例に漏れず、変質形骸化の道を巡り、必ずしも正確に受け継がれたとは言ひ難いのだが、大慧の一派は禅門に栄え、大慧禅はその宗派その門流の如何を問わず、禅門内に濃厚な影を落とすことになるのである。そして、この国家危機を背景にして南宋が生み出した大慧禅の形骸化を決定的なものにしたのは、南宋の滅亡であった。揺れ動く歴史社会の動向に密着した大慧禅も、その基盤であった南宋の滅亡・士大夫の没落によって、社会の動きに真向から食い付いていく鋭い牙を抜かれ、大慧の法系は元代に入っても栄えるものの、鎮護国家の穩健な禅へと成り果てていくのである。このことは取りも直さず、南宋を代表する禅の終焉を意味するものであった。

## 二、不住・退休の系譜

「大明高僧伝」巻五などによれば、元代禅門に栄えたのは円悟克勤(一〇六三〜一一三五)下の大慧・虎丘の両派といわれ、大慧派も元叟行端(一二五五〜一三四一)・楚石梵琦(一二九六〜一三七〇)などの禅匠を輩出して依然法系を繁らせるが、その生命ともいえる対社会的能動性をいわば骨抜きにし、形骸化の道を辿った大慧派に替わって元代に注目すべき動きを示したのは、天目中峰を頂点とする虎丘派であった。虎丘派では南宋に無準師範(一一七八〜一二四九)ら多数の名僧が活躍し、彼らは徑山を始めとする名刹に歴任して法席を賑したが、その禅風は大慧の影響を濃厚に受けており、所詮大慧派の動向と著しい差異を認め得るものではなかった。併し、その虎丘派も元代に入つて様相を一変することになる。

前述の如く、高峰原妙が天目山の師子巖に入り死関に住することになるのは、奇しくも南宋滅亡と時を同じくしており、元代虎丘派は、その隆盛の性格を窺わせる象徴的なスタートを切ることになる。高峰は、悲惨を極めた元軍の侵攻が身近に迫り、弟子達が四散した中であつて、一人門を閉じて危坐自若としていたといわれる豪僧で、明の雲棲株宏(一五三五〜一六一五)は、「自来此の事を参究して最も精鋭を極むるものは、師に逾える者なし。……近くは慈明・妙喜の風あり、遠くは徳山・臨済の諸老を下らず」(高峰大師語録・序)と高峰を激賞したが、山中に隱遁

すること前後三十年、自ら戒律を重視する厳格な実践修行に邁進した高峰は、生涯一刹に住することなく、死関に入って十七年目の元貞元年（一二九五）、五十八歳の生涯を閉じることになる。

僅か百人ほどの高峰の弟子の中で傑出した者は、死関に法を受けた天目中峰と断崖義了（一二六三〜一三三四）の二人といわれる。だがその道声を以て仁宗・英宗の帰依を得、数多くの名士と交遊を持ち、死後国師号の下賜と広録三十巻の入蔵という栄に浴したものは、他ならぬ天目中峰であり、彼の出現によって師高峰の名は揚り、虎丘派の名は後世に燦然と輝くことになるのである。併し後述する様に、中峰はその名声にも拘らず、生涯の大半を江湖山林を移り行き草廬に住する生活に費し、度重なる名利への招請にも一切応ずることなく、その生涯を終えるのである。そしてこの傾向は中峰の弟子にも受け継がれていく。

中峰の名声を受け継いだのは、「楞嚴經会解」・「浄土或問」の著者として知られる天如惟則（一二八六〜？）で、天如は忽滑谷快天氏に「陽禅陰浄」と評されている様に、師中峰の禅浄一致への傾倒を引き継ぎ、更に進めたことで後世知られるが、この天如も松江の九峰の間に隠れること十二年、後に蘇州の師子林に引き籠り、名山名利への招請を断わり続けている。この天如の道声が、当時師中峰に劣らず非常に高かったことは、彼の存命中に既に語録九巻が刊行され、又順帝から仏心普濟文慧大弁禅師の号と、金襴の僧伽梨とを賜わったことから十分窺えるが、天如はこの高い名声にも拘らず、今日その寂年を知ることが出来ないのである。天如について生存が明らかなのは、語録付録の「師子林菩提正宗寺記」の書かれた至正十四年（一三五四）、天如六十九歳の年であるが、この三年前には河南で既に白蓮教徒の反乱、所謂紅巾の賊が起こっており、この頃時代は元朝滅亡へと急速に向っていたのである。天如六十八歳の至正十三年には、張士誠が高郵（揚州）に拠って誠王を称し、三年後の至正十六年には、後の明の太祖朱元璋が応天（金陵）に拠って吳国公を称している。そしてこの同じ至正十六年の二月、天如の住する師子林の所在地蘇州は反乱軍の手に落ち、隆平府と改名されて張士誠の拠点となるのである。この様な元朝瓦解の混乱の中、元代虎丘派の最後を示すかの様に、天如惟則の消息は消えてしまうのである（2）。

以上の様に、元代禅門を代表すると思われる虎丘派の三代は、共に生涯名利に入ることなく、退休を慕いつつ生涯を終えるという、一貫した姿勢を示しているのである。つまり元代虎丘派は、不住・退休の系譜とでもいうことが出

来るのではあるまいか。そしてこの系譜は、大慧禪が南宋と運命を共にしたのと同様に、元朝の盛衰と運命を共にし、元初の混乱の中から生まれ、元末の混乱に巻き込まれて消えていくのである。

その評価必ずしも高からず、忽滑谷快天氏の「禅学思想史」以後、見るべき研究のない元代禅宗思想史ではあるが、この系譜に大慧禪に代わる元代禅門独自の變遷と、その特質とを見出すことが出来るのではあるまいか。今回は、この系譜の中でも特に重要な位置を占めると思われる天目中峰を取り上げ、その生涯を簡単に見ておきたいと思う(3)。

### 三、中峰行状(上)

天目中峰、諱明本、俗姓孫氏、母李氏。南宋の景定四年(一二六三)十一月二日、首都臨安府に近い錢塘に、七人兄弟の末子として生まれた。時あたかも元の阿朮が征南都元帥に任じられ、南宋討伐を開始する翌年のことであり、時代は早や風雲急を告げていたのである。中峰の幼年時代について詳しいことは分からないが、七歳の時に市学に通い論語・孟子を学び始めたところから、両親は一応の教育は受けさせようとしたらしい。併し九歳の時に母親が亡くなると、中峰は学問を輟めることになってしまう。

この頃、南宋側の戦況は悪化の一途を辿っていたが、特に咸淳九年(一二七三)二月、知襄陽府・京西安撫副使であった呂文煥が降伏し、襄陽府を元に明け渡して以後、宋の軍隊は総崩れとなり、宋滅亡の色は濃厚なものとなっていく。そして徳祐二年(一二七六)一月、都臨安府にあった当時七歳の恭宗は、遂に無条件降伏を申し出、同年三月、南宋の都であった臨安府は杭州と名を改められ、怙古兀台が都督の任に当たることになるのである。南宋の完全なる滅亡はこの三年後のことであるが、錢塘にあった中峰にとっては、この時が事実上の南宋の滅亡であったと思われる。この時宋に残された領土は、同年七月に降伏した淮南東路を除けば、最早や南方の福建路と広東の東西兩路のみであった。そしてこの翌年景炎二年(一二七七)に、当時十五歳の中峰は出家の決意をするに至るのである。

この決意に至った理由については、中峰自身何も述べていないので知るべくもないが、早く母を失ったことや悲惨な戦争を目の当たりにしたことが、やはり仏教に近づく要因であったと思われる。ともあれ、出家を決意した中峰ではあったが、この決意にも拘らずこの時には出家を果たしていない。その理由について中峰は、「蚤く出家の志を負

うも、世相日に拘わるを以て、百計するも脱するなし」(東語西話)と言っており、「行録」二十四歳条に「(祝髪を)父命未だ許さず」とあることや、彼が末子だったことを考え合わせると、父親の反対がその主な原因だったと思われる。だが出家しなかったとはいえ、その仏道への憧憬の念は並大抵のものではなかった。

「年十五、志を決して出家せんとす。礼仏然臂し、誓って五戒を持す。日ひるには法華・円覚・金剛諸経を課し、夜には則ち常行(念仏行道)常行三昧の意か?)し、困づかるれば首を以て柱に触れて自ら警す。居、靈洞山(金華の洞巖山の別名)に近ければ、時に山顛に登りて禪定を習う。」(行録)

翌祥興元年(一二七八)十二月、臨安府から南方に逃れ、恭宗の弟の端宗(同年五月死去)、次いで衛王昺を擁立して最後の抵抗を試みていた南宋の遺臣達の中、文天祥が五坡嶺に捕えられる。翌年正月、張世傑らは広東沖の厓山に必死の攻防戦を繰り広げるが、宋軍は次々に降伏し、遂に二月六日、陸秀夫が衛王昺を背負って入水、後宮諸臣もこれに従い、最後まで戦った張世傑も溺死して、ここに宋朝は三百年余り続いた歴史を閉じるのである。時に至元十六年、中峰十七歳の時のことであった。

この前後から高峰に参ずる二十四歳までの中峰の動向については、ほとんどその記述がないが、中峰の参究過程の重要な出来事として、甫冠の年(二十歳)、中峰は「伝燈録」を読むうちに、「庵摩羅女、曼殊に問う、明らかに生は是れ不生の理なるを知るに、甚麼なんとしてか却て生死に流転せらる」という所に至って疑を生じたという(4)。

至元二十三年(一二八六)二十四歳の五月、中峰は沙門明山なる者の勧めで、「髪長くして雑雑らず、衣弊れて易えず、弧峭厳冷にして未だ嘗て一たびも函を啓いて笑わず」(普応国師道行碑)と言われ、陰絶の門戸を誇っていた高峰原妙を始めて天目山に訪ねる。この時高峰は、中峰が法器なるを見てとってすぐにも祝髪させようとしたが、中峰は父親が許さないと行ってこれを断わる。すると高峰は、「闍夜多尊者の出家因縁(5)を話して父上をお諭しなさい。自分から進んで(迷界に)沈溺しますまいぞ」と中峰に警策を与えたという。この時高峰四十九歳、死関に入って八年目のことであった。中峰が生涯師とした唯一の人であるこの高峰との出会いは、中峰の一生にとって測り知れない意味を持つ重要な出来事であったに違いない。固より在家の身とはいえ並々ならぬ求道心に燃える中峰は、恐らくは

独学するのみでなく、多くの善知識に参じたであろうが、自らの悟道体験について貝の如く口を開かない中峰は、高峰との出会い以前にどの様な禅者と接触を持ったか、全く語らない。その口から名が出ない所から見ても、有名な善知識には参じなかつたのであろうか。

ともあれ、疑情を起こして五年目、在俗とはいえず中峰はその俊鋭な根器もあってか、この高峰との出会いの頃には最早や機縁も熟しつつあり、大徹大悟の日もそう遠い先のことではなかつたのである。果してこの年、金剛般若経を誦むうちに、「荷担如来」の処に至って恍然として開解し、内外の典籍すべてその義趣に達したという。併し「識量の依通であつて悟りではない」と自ら感じていた様に、大悟に至るまでにはまだ幾分の途程が残されていたのである。

翌年二十五歳になつた中峰は遂に意を決し、天目山の師子院に於て高峰に従つて雑染出家して、死関に入ることになる。天目山は、「東南の諸山に於て最も高寒なり」(普応国師道行碑)といわれる氣候厳しい地であり、又高峰が住していた小洞死関のある西峰師子巖は、地を抜くこと千仞の崖石林立する難所で、大志を負つた者でなければ、崖に望んで退かない者はなかつたという(高峰行状)。この悪条件の下で中峰は、昼は作務・夜は禅定を修すという厳しい参究を始め、大悟に向かつて勇猛に突き進んでいくのである。

翌年具足戒を受けた中峰は、工夫も可成り進んだ様子で、その翌年二十七歳の時には、早くも流泉を見て悟る所があつたという。この時は高峰の処に証を求めに行つて打ち出されてしまふが、大悟は最早や目前であつた。中峰大悟の時の模様について、「行録」は次の様に述べている(6)。

「既而民間訛伝、官選童男女。師因問曰、忽有人来問和尚、討童男女時如何。高峰曰、我但度竹篋子与他。師言下洞然、徹法源底。」

「そのうち民間に、お上が年端もいかない男女をお召し上げになるというデマがとんだ。そこで中峰は師高峰に質問して言った、「もしひょっこり誰かやってくる、老師に年端もいかない男女を捜し出すことについて質問したら、どうされますか」と。高峰が答えて言った、「わしはただ竹篋子の大きさ(が丁度よいかどうかその大きさ)を度つて、そいつに渡してやるだけのことだよ」と。中峰は言下からりと自心に透徹した。」

中峰のその後の動向については、高峰の遷化に至るまで目立つた動きもない。二十八歳の時に一度高峰の下を立ち



去ろうとするが、引き止められて果さず、それ以後は高峰の下から離れることはなかった様である。この間の出来事として、至元二十九年に大覚禪寺が建立されている。大覚寺は、かねてから高峰に心を寄せていた鶴沙の瞿曇発（？一三一一）が、師子巖から十里ほど離れた西峰の蓮華峰に建てたもので、後年中峰はこの寺に住持として招請されることになる。

元貞元年（一二九五）中峰三十三歳の年、数年来胃疾を病んでいた高峰は、この年の十二月一日遂に遷化する。その末期の偈に云う、「来たりて死関に入らず、去りて死関を出ず。鉄蛇、海に鑽入し、須弥山を撞倒す」と。高峰古仏といわれた原妙、時に五十八歳であった。これに先立ち死期を悟った高峰は、十一月に中峰に大覚寺を属したが、中峰は第一座であった祖雍を推して辞退している（7）。

同年十二月二十一日、高峰の遺骸を死関に塔し畢わった中峰は、宿志に酬いんがために飄然として天目山を去り、この後山林江湖を移り行き、長く居を定めぬ「幻人」としての面目を現わしていくのである。中峰はいう、

「余が初心出家は、志、草衣垢面して頭陀行を習うに在り。」（東語西話）  
一刹に住することなく、草衣垢面の頭陀行を行なうことこそ、中峰の宿志であった。

#### 四、中峰行状（下）

天目山を下りてから後、中峰が行動した地域は、「護法録」に「国師（中峰）既に法を高峰妙公に得、唯だ人の知りて其の出家を挽かんことを恐れて、深く自ら韜晦し、往きて三呉の間に遊ぶ」（巻五、呉門重建幻住庵記）とある様に、その主な行動範囲は、天目山から太湖・長江に至る浙江の北部から江蘇の南部に限られており、彼の足跡はさほど広範囲に及んだわけではない。

天目山を去った翌元貞二年（一二九六）、三十四歳の中峰は呉門（蘇州）を往来していたが、明くる大徳元年に初の長旅に出ている。つまり同年春、長江を上り安徽の天柱山（皖山）に登った中峰は、夏には更に長江を上って江西の廬山に遊び、冬になって長江を下り金陵まで戻ってここに十月滞在するのである。

そして金陵から戻った中峰は、大徳三年（一二九九）の冬、呉興の弁山に庵を結ぶ。これが最初の幻住庵であった

(8)。

「己亥（大徳三年）冬、呉興弁山の彬・澄二師の雲半間に憩う。頃焉して茅を資福寺の後の黄沙坑に結ぶ。幻住庵の名、乃ち斯に於て著わる。」（中峰広録・卷二十二、弁山幻住庵記）

これ以後、「寓る所に随いて庵廬を草創むれば皆幻住と曰い、又因りて以て自ら号す」と「行録」にいう様に、中峰は自分の営んだ草廬を全て幻住庵と名づけ、自らも幻住と号する様になるのである。そして翌年冬には呉門に遊んで、郡人陸徳潤なる人物から寄進された平江（蘇州）の鴈蕩に幻住庵を結び、四十歳の大徳六年まで三年間ここに住居することになる。この弁山・平江の両幻住庵を結んだ頃より、僧俗を問わず中峰の下に参ずる者が急激に増えたらしく、有名な趙子昂（一二五四―一三二二）の帰依もこの頃から始まったと思われる（9）。

大徳七年（一三〇三）、瞿曇晃は中峰に大覚禪寺に住持するよう求めるが、中峰はこれを固辞し、請を避けて南徐（鎮江の東十五里）に逃れる。併し請は断わったものの、翌年ひとまず浮き草の如き生活と別れを告げ、九年ぶりに天目山に戻るようになるのである。つまりこの年趙子昂の招きで杭州に趣いた中峰は、大覚寺の晋山式参加のためであろうか、天目山大覚禪寺へと帰り、死関の側に廬を結び高峰の塔を守って過すのである。そして大徳十年（一三〇六）四十四歳の冬に、師高峰の開いた道場である天目の師子院に入ることになる。

中峰は名山名刹への住持を一貫して断わり続けており、生涯を通じて住持したのは、この高峰の開いた小院だけである。固よりこの中峰の入院は師高峰の遺志を継ぐものであろうし、名刹への入寺とは自ら異ったものであったと思われる。併し中峰にとってはやはり煩わしいものであったらしく、この住持も所詮長続きするものではなかった。至大元年（一三〇八）、当時東宮に在った後の仁宗皇帝から法慧禪師の号を賜わったこの年の冬、師子院を辞して呉松（勾呉）へと乞食の旅に出るのである。中峰はいう、「千金買ひ難し一身の閑、誰か肯て身を將て閻籃に入れん」（中峰雜録・上、辞住院）と。時に中峰四十六歳であった。

再び天目を下りた中峰は、翌至大二年、儀真（揚州の西）で一隻の舟を買うことになる。この年に作られた詩にい

世情何事日羈縻

世情に牽かれることもなく

做箇船居任所之

何処へ行くやら舟まかせ

豈是崎孤人共棄

人が見捨てたわけじゃなし

都縁疎拙分相宜

こんな私にゃ丁度いい

漏蓬不礙当空掛

たとえぼろでも蓬もあり

短棹何妨近岸移

短い棹でも舟は行く

仏法也知無用処

仏も糞もあるものか

従教日炙与風吹

日が照り風の吹くままよ

(中峰広録・卷二十九、己酉作舟居十首の一)

この年の大半を舟居して過した中峰は、これ以後延祐五年までの凡そ十年間、途中延祐元年に一旦天目に戻って住持するものの、この舟に乗って、水の流れに委せた行く方も知らぬ旅を繰り返すことになるのである。

中峰は翌年請われて一時天目山に帰り、師子巖西来庵の山舟に居すが、天目に籠りきりではなく、春には瞿曇発と湖山に会し、又余杭に浙西廉訪司事であった鄭雲翼と会している。そして至大四年(一三一一)四十九歳の年に、再び舟を浮かべて呉江に舟居するのである。この頃陳子聡なる人物の請によって呉江州太湖簡村の順心庵を開くことになるが、ここにも長居することなく、やがて舟の纜を解いて北へと舟を向け長江を渡っている。この舟旅は二度目の長旅であった。中峰は河南の少林へ行くべく汴水を上り、やがて汴梁に辿り着く。そして汴梁にしばらく止まり、町はずれに名を隠して居すことになるが、僧俗争って訪れ、瞻礼して「江南の古仏」と崇められたという。又この年の正月武宗が没し、三月にいいよかかねてから中峰に帰依していた仁宗が即位することになる。

皇慶元年(一三一二)春、舟を引き返した中峰は、今度は廬州の六安山に引き籠り庵を結ぶ。併し、江湖省の丞相が書を通じて中峰を訪問しようとするところを去り、秋には再び舟居して東海州に往くのである。

翌年春、中峰は舟で開沙に行くが、瞿曇発の計報を聞くや、舟を返して葬儀のため天目山に戻ることになる。この時、大覚禅寺や杭州の靈隱禅寺への住持を強く求められ、中書平章は中峰に一刹に住して教えを弘めるべきだと住持を勧めるが、中峰は住持に必要な三種の力について述べ(10)、自分には住持の力なしといい末疾を以て辞退するので

ある。

この様な中峰の度重なる住持要請の拒絶は、一体何を意味するのであろうか。中峰の生き方を一瞥する時、中峰が世俗を離れた隠遁に憧れ、一刹に住持することすらも所詮世俗的な煩わしさの延長にすぎないと感じて、これから逃れようとした様に思われるが、この中峰の生き方を、単に現実社会からの逃避として理解し片付けてしまふことは、必ずしも中峰の真意を解したものだといえないのではあるまいか。中峰の隠遁指向が単なる逃避でないことは、世俗を離れて草庵を結ぶのは已事究明のための活計であると中峰自ら述べ、住庵が偷安逸居の計に墮することを厳に戒めていることから察せられよう（中峰広録・卷四下、示成上人卓庵）。更に突き詰めるならば、「平昔惟だ退休を慕うは、世を矯り俗を絶するには非ず」（東語西話・下）と言いつ中峰の隠遁的生き方の裏には、自心を見失い目先の利益や権力を追い求める世人に対する手厳しい批判さえ、そこに読み取ることが出来るのではなからうか。中峰の次の語を見よ。

「世の味き者は、道徳を捨てて権勢に附し、自ら其の危きを知らず。猶お嗷嗷として終日人の我に服せざるを尤む。何ぞ其れ謬れるや。」（山房夜話・下）

延祐元年（一一三二）、中峰は再び師子院に入り、翌年には大窩（師子巖付近の洞穴か？）に庵を結んでいる。併し延祐三年春、仁宗の命令で宣政院使が釈教整治のため杭州に趣き、天目山に来ると言うことを聞かや、中峰はこれを避けるために天目山を下り、舟を浮かべて鎮江へと向かう。そして夏には舟を南潯（太湖の東南）に泊し、冬には長江の岸に舟を寄せており（空明軒記）、この年はほとんど舟居して過したらしい。そして翌年には丹陽（鎮江の南）に舟を着け、蔣均の建てた大同庵に住している。

延祐五年（一一三六）、五十六歳の中峰は舟旅と別れを告げて天目山に帰る。そして、これ以後遂に再び舟による長旅に出ることなく、生涯を終えることになるのである。この年の九月、仁宗皇帝は中峰に仏慈円照広慧禪師の号と金襴の袈裟を下し、師子院の名を師子正宗禪寺と改め、更に中峰の師高峰に仏日普明広濟禪師の号を下している（11）。師子院の昇格は、中峰が他寺への住持を拒み続けたために特に行なわれたものであろうが、これによって草庵に住しているとはいえ、仮りに一刹の住持になった中峰は、賜号等の待遇もあってその名声が天下に響き渡り、知名人の

參禪も増えて、軽々しく山を下りることが出来なくなつたのであろうか。前述の如く、これ以後遷化するまでの六年間天目に在つたらしく、特に五十七から五十九歳にかけては、これといった記載も見当たらないのである。

延祐七年（一三二〇）正月、中峰に多大の恩恵を与えた仁宗が、三十六歳・在位十年を以て崩御し、三月に当時十八歳であつた仁宗の嫡子碩徳八刺が英宗として即位する。そして英宗の至治二年（一三三二）、中峰は当時空席であつた徑山への住持を強く求められるがこれを断つてゐる。（この時に徑山に入つたのが大慧派の元叟行端である。）この年六十歳になつた中峰は、この頃より体調が思わしくなかつたらしく、その死期が近いのを悟つたのであろうか、この年の夏に西峰の南三十里にある重溪複澗・穿徑崖陰なる中佳山を死地と選んで、ここに庵を結んでゐる。併し庵を訪れる人が後を断たず、その跋渉を愍んでやがて又師子巖の草廬に戻るのである。この年の出来事としては、六月に中峰と長年に渡つて親交のあつた趙子昂が逝去し、中峰は対靈小參（中峰広録・卷二）を行つてゐる。又十月には、仁宗に続いて中峰に帰依してゐた英宗から、香と金襴の僧伽梨を賜わつてゐる。

至治三年（一三三三）春、中峰は自らの六十年の生涯を「六旬の幻跡」と評して出家の始末を叙べ、六月十五日門人に遺誡をし、十日後に疾を示す。この時、弟子達は中峰に薬を飲ませようとするが、中峰は「青天白日、曲げて人情に徇わんや」と言つてこれを断つたという。そして八月十三日、中峰は外護となつた人々に自ら手紙を書き、法友知人達に別れの偈を残し、翌十四日遂に遷化するのである。末期の言に曰く、

「我に一句あり、大衆に分付す。更に如何と問わば、本の抛るべきなし。」（行録）  
時に中峰六十一歳であつた。

笑隱大新（一二八四〜一三四四）は中峰を評して、

「妙喜（大慧）の波瀾あるも、凌霄の峰に住せず。円悟の福慧あるも、延和殿に對せず。然れども万納趨風するごと、豈に止に千七百の圍繞（大慧の弟子の数）するのみならんや。金襴両たび賜わり、寵、中使の召見に逾ゆ。正体、偏円を絶し、虚空、背面なし。月景春容処処同じ、人間に留与して方便を作す。」

（笑隱大新禪師語録・卷三、中峰和尚像真讚）

大慧派の笑隱をしてこの様に大慧以上と絶賛させたことから、元代禪門に於ける天目中峰の存在の比類なき大

さを窺うことが出来よう。

六年後の天曆二年（一三二九）、元朝の政争のため多少遅れることになるが、中峰は智覚禪師と諡され、更に五年後の順帝の元統二年（一三三四）には、「中峰広録」の完成入蔵と同時に、普応国師と国師号を賜わることになるのである。

## 五、結 び

元の中葉に径山に化を振った大慧派の元叟行端は、中峰を「巍巍堂堂、焯焯煌煌、言、舌なくして五湖四海に充塞し、名、翼なくして九有八荒に軒翥す」（元叟行端禪師語録・卷六）と評したが、中峰の「六句の幻跡」は、その名声にも拘らず実に一刹に住することなく江湖山林をさまよい、各地に草廬を結んでは再び舟に揺られるといった、幻人の名に違わぬものであった。「幻人は幻法に於て実に未だ曾て悟らず」（幻住家訓）と自身の悟明の欠如を繰り返し説き、「尋常好事者の称する所となるは、蓋し報縁の偶然のみ」（東語西話・下）と自ら進んで世にも出ず、「只だ山辺と水辺とを憶う」（中峰雜録・上、寄陸全之）と退休を慕って止まなかった中峰の生涯は、元代虎丘派の不住・退休の系譜としての一側面を、余す所なく示していると思われる。

固より中峰の禅は、その隱遁的な生涯からも察せられる様に、対社会的面に於て大慧禅より引き下った感があることは否めない（11）、陽明学を引き金とする明代思想界の高揚・万暦の仏教復興に、大慧ほどには濃厚な影を落としたとはいえない。併しその示唆に溢れた語録は、雲棲株宏をして「此の老（中峰）の千言万語は、只だ人をして話頭を看、真実の工夫を做し、以て正悟を期すこと淳切透快ならしむ。千載よりして下、耳提面命するが如し」（禅関策進）と言わしめた様に、人々の心を深くつかみ取らずには置かないものがあり、後世広く人々に読まれることになる。このことから分かる様に、中峰が禅宗思想史に大きな足跡を残したことは、見落とすことの出来ない事実なのである。

元代禅門は、禅浄一致への傾斜・清規の再編成という独自の動きを示す。その動きを禅の墮落・形骸化への道と見るか、それとも歴史的必然に従った新たな展開と見るかはしばらく置くとして、大慧禅以後、明代万暦の仏教復興に

至るまでの禅門の動向を明らかにすることは、禅宗思想史のみでなく宋明思想界全般の動きを知る上にも無意味なことではあるまい。そしてその変遷の姿の一端を、中峰を中心とする元代虎丘派に見ることが出来るのではあるまいか。

〔註〕

(1) 陳建は次の様に言っている。

「仏学至朱子出而始衰、而儒仏異同之弁始息。而後士大夫自此無復參禪問道於釈氏之門者矣。」(学菴通弁・卷十二)

(2) もちろんその後法嗣の絶えた天如とは別に、金華伏竜山に住していた千蔵元長(一二八四—一三五七)の法系が、虎丘派の正統として明代へと流れていくが、当時の名声並びにその果した役割、更には中峰禅との繋がりを考えた時、天如惟則の方が元代禅門に於てより重要な位置を占めると考えられる。

(3) 以下の行状は、「中峰広録」卷三十の「行録」・「塔銘」・「道行碑」と、卷十八の「東語西話・下」の最後の段を中心にして纏めた。

(4) 「行録」による。典拠未詳。「増集続伝燈録」は「庵提遮女、文殊に問う」に作る。現行の「景德伝燈録」にはこのままの文は見当たらない様であるが、次の様な類似の文が見える。

「又一日師問修山主曰、明知生不生性、為什麼為生之所留。」(卷二十四、襄州清谿山洪進禪師)

(5) 「五燈会元」卷一の鳩摩羅多尊者の条参照。

(6) 「五燈会元統略」・「五燈嚴統」同じ。「山庵雜録」は金剛経の「荷担如来」で悟道といい、「増集続伝燈録」・「禅関策進」・「釈氏稽古略統集」は流泉を見て悟道といっており説が一定していない。これは中峰自身が不悟を標榜していたことに原因があると考えられる。なお「行録」に従った場合、悟道の時期が不明となるが、「東語西話」によれば中峰は流泉を見て感ずる所があった二十七歳の年に堂司となっており、翌年には早くも高峰の下を離れようとしている所から、悟道は二十七から二十八歳にかけてのことと見てよからう。

(7) 「高峰塔銘」によれば、大覚禅寺はその建立当初から祖雍に委されており、上座の祖雍に遠慮もあつたであろうが、中峰がその後度々住持の請を断わっていることから見て、住持の意志は全くなかつたのであろう。

(8) 「行録」は幻住庵結庵を大徳二年とするが、「廬州弁山」という誤記があり(廬州は湖州の誤りであろう)、この記述は信頼に足らないと思われる。更に「東語西話」も大徳二年としているが、「東語西話」が呉門(平江)幻住結庵としている大徳三年から、師子院を領すとする大徳九年までの記述は、「行録」その他より全て一年ずつ早くなっており、弁山結庵の大徳二年も一年ずれて大徳三年の可能性が強い。このため今回は「弁山幻住庵記」の大徳三年に従った。この場合大徳二年が空白となるが、恐らくは金陵より戻って(「東語西話」の前年の条に従えばこの年の秋以降のことになる)、呉門もしくは呉興の付近に居たのではあるまいか。なお上述の理由で、「東語西話」の大徳三年から九年までの記述は全て一年遅らせて用いた。

(9) 趙子昂は中峰と親密な交遊があったと思われ、二人の関係については稿を改めて論じたいが、子昂が常に弟子と称していることや、日本に伝わる中峰宛ての手札の内容からも分かる様に、子昂は中峰の在俗の一信者に過ぎなかったようで、中峰も小参等を見る限り、法友というよりも外護者としてしか評価していない様である。よって「禪燈世譜」では子昂を中峰の法嗣としているが、大慧と張九成との関係などとは自ら異ったものだったと思われる。

(10) 「行録」の他に「山房夜話・下」にも同様の話が見える。

(11) 「増集統伝燈録」によれば、この時に仁宗は中峰を招聘したが中峰は趣かなかったという。「釈氏稽古略統集」は招聘の年を明記しておらず、「南宋元明禪林僧宝伝」は招聘を至大元年、青宮に在った仁宗が中峰に賜号した際とする。「行録」その他には招聘の記述は見当たらない。

(12) 中峰の隠遁的な在り方に対しては、熱心な弟子であった趙子昂でさえも非難めいたことを言っている。皇慶元年(一一三二)八月一日、六安山に在った中峰に宛てて書かれた子昂の手札には次の様に言っている。

「六月廿日到家。继而月師過訪、備知吾師住六安山中、道体安穩。甚(善)。但俗境相驅迫、固不得不爾。然仏菩薩用心、恐未必如此逃避也。世事如雲、可撥遣則撥遣、不可撥遣亦隨緣而已。何必爾耶。」

(国宝、趙子昂書、与中峰明本尺牘・第六札)